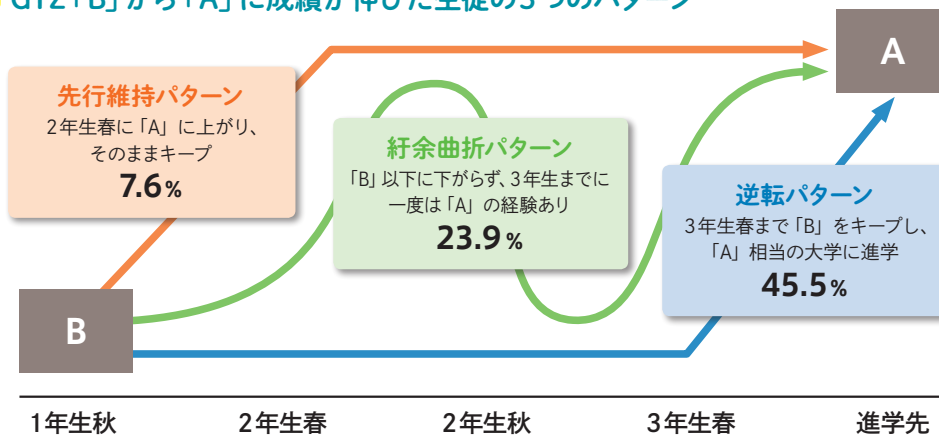


## 高い志望の実現には 「学習内容の俯瞰」が鍵に

ピックアップデータ ベネッセコーポレーション「スタディーサポート」

データ1 GTZ「B」から「A」に成績が伸びた生徒の3つのパターン



データ2 成長パターン別・学習の仕方と自主学習時間の推移〈2年生春→2年生秋→3年生春の推移〉

学習の仕方	ただ暗記するのではなく、理解して覚えるように心がけている (%)			重要なところがどこかを考えて学習するようにしている (%)			習ったこと同士の関連をつかむようにしている (%)			何から学習したらよいか順番を考えるようにしている (%)			自主学習時間 (分)		
	2年生春	2年生秋	3年生春	2年生春	2年生秋	3年生春	2年生春	2年生秋	3年生春	2年生春	2年生秋	3年生春	2年生春	2年生秋	3年生春
成長のパターン															
先行維持パターン	70	71	82	66	67	78	49	55	69	48	48	74	91	107	130
紆余曲折パターン	64	64	77	63	64	74	44	49	61	49	48	72	83	92	114
逆転パターン	58	58	72	60	60	71	39	41	54	46	49	68	67	75	98

注1) 2016年度高1、2017年度高2、2018年度高3、2019年度4月進学の生徒のうち、1年生秋、2年生春、2年生秋、3年生春の「スタディーサポート」と入試結果調査の5地点のデータのある48,866人のデータを基に算出。注2) 表内の(%)の値は、それぞれの質問に対する「とてもそう思う」と「ややそう思う」の回答率の合計。注3) 表内の(分)の値は、平日の自主学習時間の回答の平均値。

生徒の学力をS1からD3までの15段階で評価するベネッセの学力指標、GTZ(\*):「スタディーサポート」の受験者で一番多いのは、学力「B」の生徒だ。そのうち、1年生の秋は「B」で、最終的に「A」相当の大学に進学した生徒の成績推移を見ると、大きく3つのパターンに分かれる(データ1)。

3つのパターンの各生徒に見られる学習の仕方の変化について分析したところ、ある共通する傾向が見取れた(データ2)。それは、いずれのパターンにおいても、「ただ暗記するのではなく、理解して覚えるように心がけている」や「習ったこと同士の関連をつかむようにしている」など、学習内容を俯瞰的に捉えながら学ぶことができるようになる生徒の割合が、3年生の春までに増えているということだ。特に、2年生の春に「A」に上がり、そのままの成績をキープした「先行維持パターン」の生徒は、「ただ暗記するのではなく、理解して覚える」という学習の仕方を、より早く意識できていることが分かる。

高い志望を実現するためには、学習時間の確保だけでなく、学ぶ内容の意味的なつながりや学ぶべき順序を自分で考えられるといった、「質の高い学習」の仕方を身につけることが重要だ。その点を生徒に伝える際の参考データとして、本データをお役立ていただきたい。

\* ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。B3からB1までの「B」ゾーンの目安となるレベルは「4年制大挑戦レベル」から「国公立・中堅私立大挑戦レベル」、A3からA1までの「A」ゾーンの目安となるレベルは「国公立・中堅私立大合格レベル」から「ブロック大合格レベル」。